

# オーストラリア、 タウンズビルにて

大森 信  
東京水産大学教授

1990年7月、真冬のタウンズビルは陽がかけると肌寒い。サンシャインステーツとよばれるクイーンズランドの中でも乾燥地とされ、一年に330日が晴れといわれるところだが、滞在中に2日も雨が降ったから、7月の雨はもう1日分しか残っていないと誰かがいった。人口12万、さとうきびや銅、錫などの鉱物資源の積出港としてローズ川の河口に開けたこの町は、海の研究者にとってはオーストラリア国立海洋研究所と、海洋学科をもつジェームズ・クック大学があることで知られている。もっとも、海洋研究所は市街から50キロメートルも離れた南東部の国立公園区域にあるし、大学も車で約20分走ったユーカリの森のなかにあって、どこに建物があるかと思う位に広い。このように、研究所も大学も市街から遠く離れているが、一番近いのがタウンズビルというわけである。

こじんまりとした町の中心にあって、名所とされているのは、オーストラリア建国200年を記念してつくられたグレートバリアリーフ・ワンダーランドであろう。ここには水族館のほか、映画館や北クイーンズランド博物館やグレートバリアリーフ海中公園協会の事務所が並び、ホールの中にはブティックやレストランがあって、河口に沿ったヨットハーバーや対岸のマグネチック島への渡船場と

ともに大きいマリーナを形成している。

横道にそれるが、マリーナとは水際の散歩道というような意味で、アムステルダムやモナコにその典型をみることができる。そこは憩いを求めて水辺にやってきた人々が、海や船を見ながらそぞろ歩きをしたり食事や買物を楽しむところである。だから、美しい海岸を一般は立入禁止のヨット置き場や醜悪な分譲マンションで囲うというような、日本のマリーナは本当のマリーナではない。

ブリスベーンでの国際甲殻類学会に出席した後、保坂理事長と合流して、7月7日タウンズビルに着いた。そして出迎えてくれたマッキノン博士に早速ジェームズ・クック大学で2日にわたり催されているオーストラリア・サンゴ礁学会に連れて行ってもらう。その夜はバーベキューパーティで、クイーンズランド州水産研究所のボラック所長やヘロン島の臨海実験所所長のホーキングズ博士らと歓談した。そして翌日、学会の好意で、プログラムのおわりにスライドとビデオを用いて阿嘉島の研究所の紹介をさせてもらった。聴衆の関心は高く、会場に用意したパンフレットがなくなったときには、保坂さんと思わず顔を見合わせて喜んだ。

9日は早朝から一日中オーストラリア国立海洋研究所をたずね、滞在中の鮎貝博士(動物

プランクトン学)のお世話で、よく整理された図書館や研究所を見たり、主だった研究者たちと話したりしてすごし、10日は激しい雨の中をグレートバリアリーフ・ワンダーランドに出かけた。水族館では、研究主任のジョーンズ博士が館内を案内し、大水槽の構造や飼育水の浄化装置を詳しく説明してくれた。彼は阿嘉島に縁のあるカリフォルニア大学のハムナー教授の下で仕事をしたことがある、カナダ生まれの研究者である。

水族館の目玉というべき大水槽は、容積2500立方メートル、深さ4メートルあって、人びとをあたかもグレートバリアリーフに潜ったような感じにさせる。いきいきとしたサンゴが礁を造っている水槽は世界でも例が少ないだろうが、ここでは循環水を用いているので、好適な飼育環境を維持するのは大変らしいし、かなりのノーハウを伴うようである。水は砂で強制ろ過した後、1000ワットの電灯をつけた屋外の装置に導いて、付着藻類を増殖させた網目を通して栄養塩類と付着動物を取り除き、再び大水槽に戻される。この網目は1~3週に一度取り替え、掃除をするが、人手が足らず、コストの高いこの国では頭痛のたねである。それほどまでに手を掛けても、大水槽の水は野外のサンゴ礁の水に比べると、かなり透明度が悪い。私達は海水をきれいにすることが如何にむずかしいかを改めて考えさせられた。

大水槽は自然光を十分にとり入れるように設計されていて、覆いがない。だから大雨が降ると塩分が下がるし、日照りが続くと水温が上昇しすぎて、サンゴに悪影響を与える。

塩分や水温は常時モニターし、調節しているが、タウンズビルではさすがに水の加熱は考えられなかった。それが、私達のいた頃の記録的な寒さ(最低気温11度)のために、サンゴが死にかけているという報告が相次いで、ジョーンズさんには憂鬱な日が続いている。実際のところ、サンゴは時々、新しい、元気の良いものを野外から補給しているらしい。もっとも、そのあたりは彼との話から推察したまでである。

ワンダーランドでは、次の世代の人たちに海への関心をもたせようとする努力が目についた。ここでは子供達が遊びながら海を知ることができる。海中公園協会やコーストガードには、水中に釣糸や空缶類を捨てるのが動物たちにとってどれほど恐ろしい結果を招くかとか、サンゴ礁の上で不用意に錨を引くことがどれほどの自然破壊につながるか、などを写真や模型で示した展示が沢山あったし、おみやげ店には海や生物についてのきれいな絵本や解説書が並んでいた。阿嘉島の研究所でこれらの本をみる人は、帰りの荷物のことも考えずに沢山買い込んで、重いスーツケースを引きずってきた保坂さんのことを思っしてほしい。水族館の二階には海岸の動物を自由に触ることのできるタッチプールがあって、子供達は長時間そのそばで遊んでいる。この曲線型の浅いタッチプールには、砂場や岩礁や海藻類がうまく配置されていて、そばにいと、浅瀬にひざまではいっているようである。ここにも、子供達の視角から魚やヒトデなどがよく見られるように水面を低くしたり、危険な生物は石などで囲ったなかのほうで泳

がせるなどの細かい配慮と工夫がなされている。

研究室では2つの研究用水槽に興味をひかれた。その1つは数本のマングローブの若木が生える泥場の水のなかに沢山のアキアミが泳いでいるものである。アキアミが比較的強くて飼いやすいことは私も経験しているが、湿地の自然をこれほど見事に再現したものを見るのははじめてだった。もう1つは平衡水槽で、通気も換水もしない水槽の水が透明に保たれ、強い電灯の光の下にサンゴの群体が生きていた。この水のなかでは生産と消費と分解とがバランスを保っているから、サンゴは長時間生き続けられる。ジョーンズさんは、まだ未完成ですと言いながらもかなり自信がありそうで、公開される日も近いように見えた。

いろいろ話をしたり見せてもらっている内に、時間がすぎて、隣の博物館にいったときには、鮎貝さんがキュレーターのワーレス女史と約束しておいてくれた時間より大分遅れてしまった。ワーレスさんはミドリイシの分類やサンゴの幼生の着生の研究で国際的に知られる人である。初対面で、遅れたことを詫言ると、遠来の客ですから心待ちにしていたと笑って迎えられてほっとした。ここで、私達は阿嘉島での研究を説明し、問題や疑問を述べると、彼女は次々に自分の経験を話し、参考文献をみつけて複写してくれた。また、ミドリイシの分類については、標本を送れば同定してあげますと言うことであつたし、ケラマのサンゴ礁をみたいという申し出もあつて、私達は喜んだ。ワーレスさんは、幼生の

生残りと言う点からみると、サンゴの着生基盤は、幼生が動物による食害からどれほど逃れることができるかが重要で、質よりも形、つまり隠れ場所が沢山あつて攻撃されにくい基盤が大切ではないかという。ここでも話が長引き、外に出た時には雨が上がり、昼下がりのタウンズビルのモールには雲間から薄日が射しはじめていた。

私たちがこの町で出合った人々は、研究者もそうでないひと、皆一様に親切で好意的であつた。オーストラリアの豊かな自然と気持ちのおおらかな人々に接しているうちに、私ははじめから気にかかっていたことを忘れそうにさえなつた。それは、日本人による土地や建物の買占めに対する、この国の人々の反感である。

このところ、年ごとにオーストラリア、ことにゴールドコーストやグレートバリアリーフのある東海岸への日本企業の投資は激しさを増している。しかも、それらが狙う土地やホテルは投機性のある一等地や高級リゾートが多いから、目だつし、反感を買いやすい。地価が上昇して自分たちが家や土地を買えなくなるのではないかという不安、異質文明への反感と抵抗、環境保全への危惧、さらに、地元にはあまりお金を落とさない日本の観光ビジネスに対する不満などが重なつて、不幸なことに、今オーストラリアでは、日本といえば経済進出と観光客の動向ばかりが話題になっている。私達のいる間も、新聞にはジャパニーズ・インベストメントという文字がしばしば出たし、テレビでも問題にされていた。

もともとオーストラリアは農業国であり原料供給国であったから、工業化への遅れはいなめない事実である。国際自由資本競争の中で、この国は今、大きい試練に立たされている。しかしながら、人々はまだ伝統的で静かな生活がしたい。自分達の日常をあまり他人にかき乱されたくないのである。この辺りへの心くばりが日本の企業には欠けていると思う。ことに第三次産業が幅をきかすようになって、それらの無思慮で一人よがりの行為が日本人への信用さえ傷つけはじめた。大京観光、伊藤忠商事、それにコアラが住むユーカリの森を合併会社に切らせているといわれる大昭和製紙などが住民に名指しで非難されているのを、日本に住む私達の何人が知っているだろうか。

もちろん、これらの企業に全ての非があるわけではなかろう。自由経済の下では企業の正当な商取引が規制を受けたり、いたずらに感情論で影響されるべきではない。事実、ジャパニーズ・インベストメントはオーストラリアの経済を支えているという肯定的な記事も見たが、残念なことに、総じて日本の金余り現象は日本人のイメージダウンをまねいてしまった。

ハリウッドのコロンビア映画会社をソニーが買ったとき、ニューズウィーク誌は invasion (侵略) と書いて大々的に報じた。さすがに日本版では move into (進出) と変えてあったが、同じ映画会社の MGM をオーストラリアの資本家が購入したときは記事にもならなかった。

オーストラリアには、ワシントンの政治家

やロビイストがやる、このような底意地の悪い対日攻撃はまだみられない。しかし、相手がおとなしいのにつけあがるほど、愚かしい行為はなかろう。代表的な観光地であるエアーズロックが日本の会社を買われたら入場料を取られるだろうか、というような冗談が、オーストラリアの人々のあいだでされている昨今である。オーストラリアを旅行している間に、司馬遼太郎の“ロシアについて”(文春文庫)を読んだが、この中の、国策をかたる帝政ロシアの巨大企業が幕末の日本を会社の利益追求の対象にしかみずに行動し、“結局そのことが、日本にたいし、抜きがたい文化遺産というべき対露不信と恐怖心を生むことにつながった”(142頁)というところと、オーストラリアにおける日本の企業の行為がダブって気が滅入った。

他者のよさや立場を大きく認めるという謙虚さは、他国の人々とつき合う上での基本的な姿勢である。“国家は、国家間の中でたがいに無害でなければならない。また、ただのひとびとに対しても、有害であってはならない。……平和という高貴でかつ平凡なことばは、その上ではじめて使えるもので、他国に対し心理的にも軍事的にもおびえを感じさせている状態のなかで発すべき性質のものではない”(ロシアについて、258頁)。司馬氏のこのことばを、今こそ私達は素直に考えるときであろう。その夜、国立海洋研究所のペーカー所長に招かれた夕食のあと、南十字星のひかるタウンズビルの広い星空をながめて、そう思った。